

一度読んでください。



フレディの遺言より

フレディ松川先生著「ここまでわかったボケる人ボケない人」より

もし私が、痴呆性老人になったら、その時、私を介護してくれるあなたに、次のようなことをお願いしておきたいと思います。これらのお願いは、決して難しいことでもなければ、あなたを精神的にあるいは金銭的に苦しめる物でもありません。ほんのささやかなお願いですので、ぜひ聞き届けてください。どうぞよろしくお願いいたします。

私が医者であったことをまず忘れてください。知識は遠いかなたへ消え去り、今では人の助けなしには一日も暮らせない別の人間になってしまっているのです。そんな私にあなたは静かに話しかけてくださいね。決して大きな声で私に話さないでください。

あなたが大きな声で話すと、たとえあなたが怒っていなくても、私はあなたになんだかとても強く叱られたように感じて怖くなってしまいます。本来、やさしいと思っていたあなたに、「えっ、なに！おじいちゃん」「なにやってるのよ！」などといわれるたびに、私は恐怖におののくのです。

あなたが何か、わたしにさせたいのであれば、静かにゆっくりと話してください。また私は変なことを言うかもしれません。たとえば「蛇がいる」と私が言ったら、「ナニを言っているの、蛇なんかいないわよ！」と大声で言うのではなく、「どうしたの？蛇はどこにいるの？」「どうしたいの」「じゃあ、蛇をどかせましょうね」とやさしく尋ね、そして、わたしが何を要求しても、その要求をまず受け入れてほしいのです。

私が「ごはん、まだか」と聞いた時も、「さっき、食べたでしょう！」と大声で叱るのではなく、「お腹が空いたの？じゃこれ食べるの？」と言ってクッキーの一枚でもわたしにあたえて下さいね。三度の食事のたびに、箸をうまく使えなくなり、食事をこぼしたりします。ですから、指を使っ

てたべることもあるかもしれません。その時は、無理に箸を使わせようとせず、そのまま自由に食べさせて下さいね。

また、疲れてパジャマに着替えることもなく、そのままの姿で寝てしまうかもしれません。

布団の上で寝ないこともあるかもしれません。その時も、ふとんをそっとかけてくれるだけでいいのです。あなたを悩ますことの一つに、私はあなたに「家に帰りたい」と言うに違いありません。

その時の私の心の中は、とても不安定な状態にあるのです。ですから、私が「家に帰りたい」と言ったら、家に帰る帰れないと言う問題でなく、まず私が不安を抱えているということをお分かりください。

そしてしばしば、私は自分の感情のコントロールがうまくできません。ですから、大変に気むずかしくなって、その日の気分によって、意地悪なことをあなたに言うてしまうかもしれません。また、あなたの気に入らない事をするかもしれません。実はそのときの私の気分は最悪で、私自身もその気分が嫌で嫌でしかたがないのです。でもどうしようもできない。そこで、ついあなたの言うことに反発したり、意地悪を試みたりしてしまうのです。そんな私の心の中を教えてください。その理解がボケた老人には一番必要なものなのです。

そして私の病気の最大特徴は、とても忘れっぽくなっていることです。あなたが何度、怒っても、なんで怒られているのか忘れてしまいますし、あなたが怒ったこと自体も忘れてしまいます。ですから、あなたが怒ったこと、大声を出したことを「なんで、あんなに怒ってしまったのだろう」などといつまでも後悔しないで下さいね。私は、とうに、そんな事も忘れていくのですから。もちろん、忘れっぽいために、水道を出しっぱなしにしたり、火の始末もできなくなってしまうのです。ですから、そういうことを私一人でさせないで下さい。できれば、一緒にやってくれたら、こんな安心なことはありません。

私を、正常だった時と同じ人間だと思わないで下さい。わたしは何をやっても忘れるという病気なのだ、ということを決して忘れないでください。

困ったことに、いま目の前にいる人が誰だかわからなくなります。でも、誰だかわからなくても、私は、私の目をしっかりと見て優しい声で話しか

けてくれる人が大好きです。私は、その人が誰であれそういう人の言うことを聞こうとします。

私に何かさせたかったら、ひとつずつさせてください。短い言葉で「ごはんよ」と優しく言うだけでいいのです。また、私が何かあなたに尋ねたら、やはりひとつずつ短く答えてください。長い説明をされても、私にはそれを覚える事ができないからです。

私に何か話しかけようと思ったら、私を見て、私のからだに触れながら、微笑みながら話してくださいね。私の心がさびしい時、私は自分が育った時代、青春時代の音楽をとて聞きたくになります。ソレが何という曲だったかは、思いだせませんが、ただ介護してくれるあなたと、その音楽と一緒に聞いたり、歌たったりしたいと思っています。私の知性は、たしかに衰えています。だから感性にたよって生きていかななくてはなりません。その分感性が磨かれているかもしれません。ですから、音楽以外でも、美しい夕焼けをみるとか、おいしい食事をするとかということをとていとおしく思っています。ひょっとしたら、正常だった時よりももっと感性は鋭くなっているかもしれないのです。

私に懐かしい音楽を聞かせてください。美しい風景を見せてください。素敵な匂いを嗅がせてください。着心地のいい洋服に身をつつみ、おいしい食事をあじわわせて下さい。

私が痴呆性老人になった時、私は優しい人に囲まれて、残りの人生をごく自然に過ごしたいと思っています。ですから、たとえアリババと40人の盗賊にかこまれたとしても、私は盗賊のなかでも、一番優しそうな人のそばにいたいのです。どうか、私を介護してくれるあなたが、「ポケた心」を理解している優しい人であることを祈っています。